

紳士度の高い人

矢野良臣

大平さんとの想い出を綴るにあたって、まずはじめに故人のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

大平さんと小生は、出生年こそ大平さん（明治四十三年）、小生（同四十二年）と一年前後はするものと同じ三月生まれの同県人、しかも旧制高松高商の同窓生である。その後、紆余曲折はあるものの、大平さんは東京商大を経て大蔵省に入省、小生は高商卒業後、日本銀行に入行、図らずも同じ金融に携わることになった。ところが二十数年後、日本経済の復興期に、大平さんが池田大蔵大臣秘書官、小生が一万田日銀総裁秘書役を務めることになり、再び身近に、同じような仕事をするようになった。当時の池田大臣に対する大平さんの寝食忘れての献身ぶりは、それは大変なものであったように記憶している。

その後は、互いに切磋琢磨し、かつ将来への健闘を誓い合い、大平さんは政界へ、小生は財界へと異なる道を歩むことになった。大平さんは、政府、党の要職を歴任の後、昭和五十三年十二月、遂に総理大臣に挙げられた。小生にとつても嬉しい出来事であり、早速お祝いを申し上げたが、ただひとつ、総理の健康が心配であった。それは、どんな困難な局面に遭遇した場合にも労苦を厭わない責任感の強さから生じる、あるいは、総理大臣の激務に対する不安でもあった。しかし、わずか一年半後にその心配が現実のものとなり、急逝されるとは……。志半ばにして、さぞ無念であつたらうと推察される。

大平さんを思うとき、幾多の想い出が蘇るが、ここに少し紹介することにする。

大平さんは、石田正さん（故人、大蔵省出身）と昵懇で、大変仲が良かったようだ。大平さんは、「君が辞める時には、僕も一緒に辞めるよ」とよく話された。第三者の小生が、この言葉をよく記憶しているという事実は、よほど鮮烈に印象深く感じていたからだろう。大平さんを考える時、つねに石田さんが思い出されるのは、大平さんを通じて石田さんを身近に感じるようになったからだと思う。

また、大平さんは、自分のことはとやかくいわれても、人の嫌がることは余りいわれない人であった。大平さんの言動から、人の嫌がることをいわないことが、人間の値打ちというか紳士の途として大切なことであることを学んだが、その点でも実に紳士度の高い人であったように思う。われわれ共通の友人が、ある事件を起こした時、小生が早合点をして、大平さんに迷惑をかけたことがあったが、このことで謝罪したところ、ただ一言、「彼はその時チト変でしたね」と言葉を濁されただけであった。

少年期、高商時代と健康を害することの多かった大平さんは、日頃から健康には人一倍注意を払い、また自信をも持っておられたようだ。

小生が発起人となった「大平正芳氏を囲むゴルフ会」いわゆる「太平会」は、昭和三十八年に最初の会を開催して以来、たしか総理就任後の最初のゴルフもこの会であったと記憶しているが、昭和五十四年十一月まで実に九十一回を数え、何の縁か小生の幹事が最後になり、昨年七月解散にいたった。このように長期にわたり同じ会が存続しプレーできたのは、ゴルフをこよなく愛した大平さんをはじめメンバーが健康であったからだと思う。

マスコミから「鈍牛」と渾名されはしたが、「アーウー」を交え、非常に丁寧な言葉を選び、慎重な発言が多かった大平さん、人を愛すること深く、心優しくった大平さん、どうか天国から、あの細い目で、われわれを見守っていてほしいものである。

（丸善石油化学相談役）